「真鈴のなか、キツいし熱い……。いつもより興奮してるのか？」
「し、知らぬっ」
「こんな学校の倉庫で、いつ誰かにバレるかもしれないところで自分からチ×ポ咥(くわ)えて感じてるなんて、ずいぶん立派なお嬢様だな？」
そんな軽口を叩く優志だが、セリフほど表情に余裕はない。歯を食いしばり、必死に膣粘膜の締めつけを堪えている。
「これはお前が、ゆーじがしたいと言うから仕方なく……あっ、なにをする……ひっ、や、やめ……んぎいいいいいっ!!」
腰をつかまれ、そのまま下からいきなり突きあげられた。半分ほど埋まっていた肉棒が一気に根元まで膣道に埋まる。
「うあ、す、すごい……真鈴のオマ×コが急に締まった……！」
「ひいぃっ、ひゃっ、ふひいいぃ！　そんな、いきなり奥までなんてぇ……ひっ、届いてる、ゆーじの、奥に当たってるぅ!!」
突然の突きあげに、真鈴が甲高(かんだか)い悲鳴とともに優志の上で身悶える。長い金髪が乱れ、体操服を持ちあげていた巨大な乳肉がぶるりと重たそうに揺れる。
「アアアッ、ダメ、奥はダメェ!!」
子宮口を垂直にノックするような優志のピストンに、真鈴の顎が跳ねあがる。汗が

飛び散り、あたりに甘酸っぱい少女の匂いが充満する。
「ひっ、あひっ！　や、やめろ、あっ、激しっ……んひっ、ひいいぃっ！」
がっちりと細腰を押さえこまれたまま、真下から怒濤の勢いで突きあげられては、さすがの真鈴も体裁を繕うのは無理だった。
「はぅ、ふっ、んふううッ！　うぁっ、あっ、はああ！」
内腿の筋肉を突っ張らせ、必死に優志の腰使いを受けとめる。無意識のうちに自分の乳房をわしづかみにして、襲ってくる悦楽を懸命に堪えようとする。ぎりぎりと柔らかい乳肉に指をめりこませるが、背中を駆け昇ってくる甘い刺激はあっさりと真鈴の理性を蕩けさせてしまった。
「ひあぁっ、イイ、ゆーじの、気持ちイイィっ！　あひっ、もっと、もっと奥ゥ！　ひいぃっ、す、すごっ……うああっ、ダメ、こんなのダメえっ！」
どすどすと鈍い音をたてて真鈴と優志の恥骨がぶつかる。肉棒が膣を出入りするたびに二人の体液が混じり合った淫汁が周囲に飛び散る。
「ゆーじっ、もっとゆっくり……優しくしてくれっ……こ、こんなにされたら、はひっ、く、狂うっ、気持ちよすぎて頭がどうにかなるっ……うあぁっ、あっ、はうぅっ！」
ふたまわりはサイズの小さな体操服にその豊満な肉体を包まれた美少女が、長い金髪を振り乱しながら狂乱する。真っ赤な色の瞳はすでに焦点は合っておらず、バラ色

の唇もだらしなく開きっぱなしとなり、どろりとした涎を優志の腹に垂れ流している。
体操着からはみだした引き締まった腹部は苦しげに歪み、最奥まで串刺しにされた媚唇は泡立った蜜で濡れそぼっている。
「らめっ……こんらの無理ぃ……死んじゃう、わたひ、ゆーじに壊されちゃふぅ……ひっ、ひぐっ、んぎぃいぃっ！」
一方の優志もまた、己の分身を包みこむ熱い襞粘膜の快感に、言葉を発することすらできなくなっていた。
「ま、りん……真鈴……っ……ああっ、締まる、また締められる……！」
苦しまぎれに手を伸ばし、体操着の下でぶるぶる揺れていた乳房を思いきり握りつぶす。柔らかな乳肉がぐにゅりと変形して、優志の指の間からはみでる。
「あぐぅ！　うあっ、ダメ……おっぱい、つぶれちゃ……ヒッ、らめっ、おっぱい、おっぱいが……アアーッ！」
変身前は過敏すぎる乳房も、今の姿ならば痛みを覚えるくらいに握られたほうがより感じてしまう。
「ダメ、おっぱいはダメだ、ゆーじ……あああっ、つぶれる、私のおっぱい、ぐにゅぐにゅになるっ……ひっ、ヒイィ……ッ！」
欲望のままに膣を犯され、力任せに自慢のバストを握りつぶされる。

しかしそんな乱暴な行為によって、真鈴の内に眠っていた牝の本能が揺り起こされる。好きな男に蹂躙(じゅうりん)され征服される負の悦びに子宮が震え、全身の細胞が沸騰する。
「アアッ、イク！　イク、もうイクぅ!!」
牙を剝きだし、だらしなく涎(よだれ)を垂らしながら、吸血鬼の少女がアクメを告げる。
「イッちゃう、私、ゆーじにイカされるっ、イク、イクぅ！」
優志の腕を握り、子宮から波濤(はとう)のように押し寄せてくる絶頂に汗まみれの女体を震わせる。
「真鈴、お、俺もイクぞ！」
「やああぁっ、また、また大きくなってふぅ！　はひっ、ひっ、あひィ！」
カクカクと腰を前後に揺らし、爆発寸前のエクスタシーを引き寄せる。握りしめた優志の手首に爪を立ててしまい、赤い血が流れ落ちる。
「うああっ、らめっ、もう、死ぬ……イッちゃう……死ぬ……イク、イク、イッ……ッウウー!!」
ガクン！と頭を後方にのけ反らし、桃色に染まったおとがいを晒(さらす)しながら達する。
ほぼ同時に、優志の肉棒も爆発、白いマグマを真鈴の子宮口に発射する。
「ヒッ……イッてるのに……イヤッ、イッてるところになんてダメ……ああああっ、あっ、溶ける……私の子宮が溶かされる……っ!!」